

## 清水町濱興行時代の文樂

### 附、子供首振り芝居の流行

社寺境内の興行禁止は、進運のスタートを切らうとしてゐる文樂座にとつて、どれほど大打撃であつたか知れない。根據地を奪はれた天保の改革以來、どういふ興行状態を續けたかといふと、北堀江市之側、若太夫の芝居を借りて、天保……弘化……嘉永……を経てゐる。さうして安政元年一月から、西横堀清水町濱の新埋立地に座を建て、漸やく自分の家らしいものに戻つて來たが、もちろん永久的のものでは無かつた。けれどもその興行ぶりはなかなか壯なもの、常に有名な太夫を巧みに招聘して、斯界の先頭に立つてゐたことは疑ひを容れない。かうして此新興行地に約三ヶ年間居据つてゐたが、時代とともにさしも嚴酷であつた禁令もやうやく弛んで來たのを見てとつた文樂座主植村翁はもとの稻荷社内へ復歸を願ひ出たところ、許されて、安政三年九月、再び舊地に櫓を上げることが出來た。同九日初日。『鬼一法眼三略

卷】「芦屋道滿大内鑑」櫓下の長登太夫が菊畑、湊太夫が大藏卿館、春太夫の葛の葉子別れ、

これは無論大盛況。文樂座はかうして次第に確實な地盤を築きながら明治の時代に入つて行く。

さて明治に入るまでに、ちよつと此時代を低徊して見て（天保より明治まで）おもしろい出来ごとと、淨瑠璃界の變轉を知つて貰ふに必要なことだけを拾つて行くこととする。

その一つは、南區清水町濱の興行地のことである。

この濱は天保十二年、西横堀川の川幅を狭めて、その東岸を埋立てた新築地、地固めの爲めに興行物を許されたのであつた。上繫橋（四ツ橋）から金屋橋東詰までの濱地、南北炭屋町の部分がそれである。淨瑠璃興行が始めて此土地で行はれたと思はれるのは宮芝居禁止から程なく、弘化二年二月、その頃の番附によると、『清水町濱新築地にて』と記して、梶、むら、咲太夫の連中で、『二十四孝』と、それから特に此興行の爲めに書卸されたと思はれる『西横堀築地賑。浪花名所記』を出してゐる。惣嫁場といふ一幕をチャリ語りの名人として聞えた津賀太夫（後に日本第一滑稽物語竹本山城掾となつた人）が勤めてゐるところを見ると、おそらく、此時が此土地の拓けた始めて、淨瑠璃座の始まりでもあつたのであらう。さうして此築地はずつと明治へかけて、道頓堀についての繁昌地になつてゐたことは想像するに難くはなく、説教、

祭文、淨瑠璃、歌舞伎芝居、講釋、新内、曲獨樂、からくり人形、錦影繪、貝細工などずらりと並んで、見世物や金比羅さんの出し店も賑ふ、と云つたやうな状態である。文樂座のかゝつた位置はどの邊りかといふと、鰻谷の西横堀の濱にあつた小芝居の跡だと云ひ、又は御池橋東詰南に入つた濱にあつたとも云ふ。清水町濱といふ名稱は、即ち御池橋から木綿屋橋までの間をさしての名稱で、尙又、北の方四ツ橋の間にも芝居見世物があつて、講釋定席で名高い熊の席なども東側にあつた、それから南方の木綿屋橋から南道頓堀川までの間には、興行物は無かつたらしいと、此邊の古老の話である。

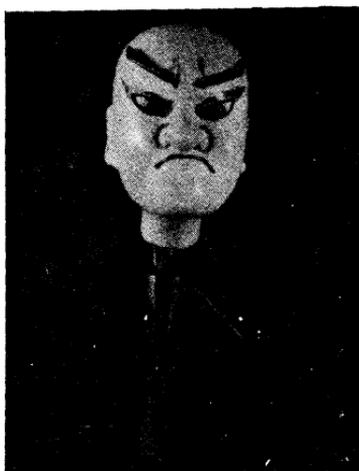
この清水町濱興行の時代に、後には吉田文三郎以來の名人と囃されたこの濱興行の人気者、人形つかひ吉田玉造にかゝる、一つ二つの挿話がある。まだ二十歳にも足らぬ青年であるが、これもやはり天保の改革に觸れて、人形を遣ふことを禁ぜられて、その天才を惜まれてゐた頃のこと。かうして禁制の錠を人形遣ふ腕におろされてゐても、一時もちつとしてゐることが出来なくて、ひそかに或る一案を案出して、舞臺へ出ることを試みた。苦心を凝らした彼れの新案とはどんなものであつたかといふと、切抜き繪の押し繪を竹の竿の先に張りつけた人形で、これをいつもの人形の代りに操るのである。けれどもこれとても、もとより人形を遣ふこと即

ち舞臺へ出ることを禁ぜられてゐる玉造が平氣で舞臺へ出られる筈はない。無論監視の役人の目を掠めてやつてゐる仕事である。兼て謀し合せてあるので、木戸番の男は役人の姿がそこらに見えるとすぐ舞臺へ合圖をする、さうすると人形は忽ち舞臺裏へ影をひそめる。とかういふ手段で毎日くりかへしてゐたのだが、こんな埒もない急拵らへの變てこな人形でも、吉田玉造が遣つてゐると見物はすつかり得心してしまつてゐて、『さながら生きた歌舞伎芝居のやうだ』といふ評判。何が人氣になるかわからないものである。ところが、此まゝこれが役人の耳へ入らねば萬歲だがさうはうまくは行かない、評判が高くなるにつれて、役人の目は光る、たうとう玉造は捕はれた、牢獄へ入れられるといふ騒ぎである。だが幸ひに玉造を惜しむ周圍の人々は百方これを嘆願して、やうやう罪を免れることが出来た。これが又人氣の出る原因となつて、玉造違法事件は逆効果を上げて文樂の人氣者をいよいよ盛り上げるやうな結果になつた。

もう一つの話。

玉造はその頃、往昔夕霧で名高い新町の扇屋の主人三郎兵衛にひみきを受けてゐた。この扇屋三郎兵衛は人形芝居に非常に趣味をもつてゐて、巧みに人形を遣ふばかりか、自身で人形の頭を彫り上げることを楽しみにしてゐるほどで、時々太夫衆の流れ場（座敷の眞中に廊下の

やうな板間をこしらへて通ひ路にした處へ舞臺をこしらへたりして、人形芝居の催しをして、太夫や家内中の者に見せてゐた。(孫にあたる中村鴈治郎の話では、後に文樂を模造したやうな人形舞臺を作つてゐたといふことである。なほ三郎兵衛遺愛の人形は古びた衣裳と共に同家に保存されてゐる)



しびんけ頭形人たれ生らか品作松近

に保存されてゐる)

ある年の正月、三郎兵衛は太夫衆や家内の人達を慰める爲め、親類縁者を招いて人形芝居の催しをすることになつた。そこで、日ごろひみきの玉造を招んで、自分の遣ふ人形の左手を手傳はせようと考へたが、困つたことには廓の中へは藝人は一切出入することならぬといふ掟があつた。そこへ氣のつかぬ三郎兵衛ではなかつたが、どうでも玉造に遣はして見たかつたので、一策を案じて玉造を茶の友人といふことにして、コツソリと呼びよせて置いた。やがて主人は三番叟を遣ひ玉造は左手をもつて舞臺へ現はれた。無論誰一人黒衣を着てゐる玉造が解る筈がない、と思つてゐると、見物の中に交つてゐた當時全盛の若

紫太夫がこれを看破して、あれは藝人に違ひない、と云ひ出した。若紫は家内の者に注意をした、皆は三郎兵衛にそれを傳へて諫言をした。廓の掟で藝人の出入を禁ぜられてゐるばかりか、ことに改革令以來藝人の取締が一層やかましくなつてゐるのだから、萬一その筋の目に止つたら、それこそ、どんなことになるかも知れない、萬一家名に疵がつくやうなことがあつてはならないから、と注告をしたので、三郎兵衛もさうと氣附いて、芝居はそのまゝで中止をするこゝとなつた。さうして玉造には記念として、その時遣つた三番叟の人形（三郎兵衛が一年間苦心して自作したといふ頭）を其儘與へて歸すことになつたので、若紫太夫も關はり合の一人として、此日の催しを惜しんで、玉造とは知らずに貸してゐた襦（これは緋鹿子友染縮緬の扱帶）を記念として贈ることになり、まづは無事に濟んだ。玉造は此二品を生涯の思出として死に至るまで自宅の床の間に飾つてゐたさうである。

この玉造が後に文樂座の最高權威である櫓下の位置に、春太夫と共に名を連らねてゐる時のことである。明治八年三月の番附を見ると、突如として一人の若い人形遣ひの名が人形連名に連らねられてゐる、その名は即ち吉田玉太郎、誰れあらうこれは名優中村鴈治郎である。玉太郎は鴈治郎の本名で、その頃はまだ歌舞伎へは籍を置いてゐないたゞの少年である。たゞの少

年ではあるが、新町切つての大きくつわ（置屋）扇屋三郎兵衛の孫ほどあつて、家庭に在る時から人形芝居に興味をもつてゐたゞけに、多少の心得はあつたのだらう。明治五年の遊女解放令施行以來扇屋は職を奪はれて、すつかり零落をして居り、女親一人を養ふ爲めに鴈治郎は背負ひ呉服の商ひをして廻つたといふ事は、かつて同氏の自傳によつて明らかな通りである。その氣の毒な状態を見た三郎兵衛恩顧の吉田玉造が、義侠的に鴈治郎の玉太郎を報恩の一端に文樂へ引き寄せて生活の一助としたのに相違ない。けれども、規約の嚴重な文樂では、如何なる事情のもとにあつても、素人が直ちに仲間へ飛び込んで來て、而かも破格にすぐ番附に名を連らね、その上相當な役を振られたのだから、これは一問題である。衆議は喧々囂々として湧いた、だが玉造の權威がかういふ物議を直ちに押しつぶしてしまつたことは想像できるし、玉造はそれ程迄に深く三郎兵衛の恩義に感銘してゐたと想像される。それで番附に名を現はした新參の玉太郎に、先代萩の沖の井の役などをふつてゐるところを見ると如何にもその格別の抜ひであつたかゝ知られるわけである。こんなわけで、吉田玉太郎の名は同十三年三月まで滿五ヶ年間連續して興行の番附面に出てゐるが、おそらく本人は半期か一年の當座だけ出てゐて、あとは有名無實であつたらうと思はれるが、要するに給料だけはとゞけてやつてゐたのであらう。こ

れは清水町濱文樂興行時代に結ばれた扇屋三郎兵衛と玉造の關係と、更に扇屋の孫鷹治郎への、玉造報恩の人情美談の挿話である。

その頃の興行界を風靡した流行物に、首ふり子供淨瑠璃といふ、淨瑠璃道から見れば世紀末的な變態性の一つの顯はれがある。これば、人形の代りを俳優がして臺詞は一言も云はず身振りばかりで芝居をする。太夫三味線の床が主であつて、人形遣ひが俳優を人形のやうに操るのであるが、もつとも此流行はすでに天明年間にも一時あつたが、天保、嘉永に至つていよいよ盛んを極めてゐる。俳優も太夫も三味線も皆子供ばかり、ちよつとお伽芝居のやうで婦人や子供客を喜ばしたものだらう。『子供首振り芝居』といふ看板を上げた天明五年道頓堀若太夫の芝居の興行では、頼太夫の床、甘輝（奥次郎）、錦祥女（花桐）、和藤内（友藏）といふ顔觸れの子供達で『國性爺合戦』が出た。この芝居を見物した當時七歳の梅玉歌右衛門が、自分達とおなじ年頃の子供が芝居をしてゐるのが羨やましくてたまらない、而かも首ふりといふ變つた形式だつたから、彼はどうでも此一座へ出て見たいと思ひつめたら、矢も楯もたまらず、その若太夫の芝居の勘定場にゐる伯父の源藏に頼み込んで、次の芝居から出して貰ふことになつ

た。その芝居は「廿四孝の三段目」、磯太夫が床、景勝（奥次郎）、お種（一徳）、母（花桐）、慈悲藏（音松）、さうして梅玉歌右衛門は横藏。尙大切の「伊勢物語」では梶太夫、春太夫、雛太夫三人掛合の床、小よし（花桐）、豆四郎（奥次郎）、しのぶ（一徳）、鏡八（音松）、有常（歌右衛門）とかういふ役割で、大へんな大當り大入りを占めた。それは偏に日ごろ信心する千日前竹林寺の不動尊の御利益であらうと子供心に喜んだ……とかう「梅玉餘響」にある同優の手簡の中に見える。それ以後各地をこの「子供首振り芝居」で巡業して廻つてゐたといふ。

その梅玉歌右衛門が有名な俳優となつた天保二年五月の道頓堀角の芝居で、操り歌舞伎打交ぜ興行といふのをやつてゐる。いふまでもなくこれは子供ではない、而かも名優と名匠との混交芝居である。前が「義經千本櫻」、切が「嬢景清八嶋日記」の日向嶋で、この切狂言が即ち打交狂言なのである。太夫には藍玉こと組太夫、三味線鶴澤勇造、人形吉田千四といふ大家揃ひで、歌右衛門は景清の役を首振りて勤めてゐる。歌右衛門の口上書に

此度操り方衆中と打交にて組太夫殿を以て首振り操りにて私相勤め申候

とある。この口上書を解釋すると、なかなか意味がある。組太夫殿と云ひ、全文甚だ敬意を拂つてゐる。それは何故かといふと、元來淨瑠璃太夫は俳優とは一緒に公衆の面前へは出ない、

芝居の地を勤めてはチヨボ（芝居の下座に使ふ淨瑠璃）に墮ちるのだから出来ないことになつてゐる。だが今度の場合はかうして俳優を臺詞なしの人形として使つてゐるのだから差支ない、といふので、他の太夫仲間からも何等の故障は出ない、そればかりか歌右衛門は以上の如く太夫を尊重して、叮嚀に自分の舞臺へ迎へてゐるのであるから、それでよいわけである。

またこれより以前竹本政太夫、豊竹駒太夫、同君太夫、人形の吉田冠藏や三吾などの大家連も此種の興行に出てゐることが記録にある。ずつと後になつて明治二十二年頃、角の芝居で、先代市川團次（齋入）が「二十四孝」の八重垣姫に扮し、豊竹柳適太夫、豊澤廣作の床、吉田辰五郎の手摺で、首振り人形仕立で勤めてゐることは知つてゐる人々もあらう、勝頼（延三郎）、濡衣（巖笑）であつた。

併し、どつちかといふと大人の首振りよりも、子供の首振りの方が人氣がよかつたのは當然で、どうせ變態性のものなら、可愛い子供の方がむしろ徹底してゐるわけである。嘉永六年三月に道頓堀若太夫の芝居で興行した「子供首振り芝居」が、此種の興行の中興とも云つていゝだらう。「妹背山三段目」が美しい繪番附になつて發行されたりしてゐる。大判事（市川福太郎、十三歳、後に齋入）、久我之助（實川延太郎、六歳）、定高（市川猿之助、十一歳）、雛鳥

(三榊源五郎、六歳)、腰元(淺尾房之助、五歳)。太夫側は妹山が(當組太夫、十七歳)、背山が(長子太夫、十七歳後に五世彌太夫)、三味線は(豊八、十七歳)、(團八、十七歳)とである。この以後子供首振りはなかなか侮り難い勢ひで流行して行き、翌安政元年六月、竹田の芝居では、前「朝顔日記」、次「今昔浪花噂」、「切籠曙」が歌舞伎、大切が即ち打交興行で「壇浦兜軍記」琴責、子供役者では、市川米藏(後の市川左團次の兄)が岩永、中村政治郎(後の福助)が阿古屋、重忠を中村嶋之助、榛澤を中村駒之助。子供太夫は岩永が長子太夫、阿古屋が當組太夫、重忠が小住太夫。三曲は寛治改め鶴澤大吾郎、以上の役割である。この流行は勿論道頓堀にはかぎらず、御靈裏門の席、座摩神社裏門の席、北堀江阿彌陀池の席、その他あちらこちら可なり盛んである。この流行につれて子供役者からはいろいろの顔觸れを首振り芝居へ送つてゐる。中村米吉(後中村歌六)、片岡松之助(後中村紫琴)、實川額藏、實川延松、市川赤助、尾上多見七、尾上多見之助、嵐雛之助、中村雀之助、中村福松、中村もしほ、三榊福太郎、中村玉太郎、片岡玉二、嵐豊丸、嵐芳之助など。

こんな風にだんだん子供首振りが盛んになるにつれて、淨瑠璃太夫と俳優との境目が怪しくなつて來たものと見えて、淨瑠璃の結社因講では安政四年十二月、首振り淨瑠璃歌舞伎打交興

行に就ての是非が論議されて、結局は弊害ありと認めて、今後此種の興行に出演するものは除名處分に附すといふやうな決議をした。これで當分仲間からは一切出演するものは出なくなつたから、勢ひ中絶の姿で、さしも流行を極めた子供首振りも影をひそめたが、それはたつた一二年のことで、三年目の萬延元年から又々再燃して、ドシドシ流行し出したのである、それがたうとう明治維新まで續いてゐる。後には一廉の俳優になつた多くの少年俳優が、この首振り芝居の影響を多分に享けてゐたことは争はれぬ事實であらうと思ふ。

なほかうした子供淨瑠璃の起源はいつの頃のことかと調べて見ると、現在のところ、もつとも古い文献では、享保十六年六月一日、東の芝居の豊竹座で、近松門左衛門の「酒吞童子枕言葉」の出た時、その幕間に「間の物」といふ斷り書がついて、子供達の道行風の狂言が出てゐる。むろんこんな性質だから、道具や背景は用ひないで、幕を背後にしてやつたものであらう。越前少掾の門人で、左近、右近、三味線は野澤文二郎といふのが勤めてゐる。右近がワキである。どうやらこゝらが子供首振り芝居の始めであるらしい。前に敍べた説教讚語座の説教芝居の役者は、悉く十三歳以下の子供であつたことは同關係の文書にも見えてゐる。